めるべきである。又、「総選挙」「全日本」等の「総」「全」というのがあるが、これらは「全体」「全きこと」と云う意味を有する名詞と認められるから、「総選挙」「全日本」は複合語とすべきだと思うのである。

以上の様に、強め、丁寧、音調等の抽象的意味で附けられ、下にある単語のもとの意味に変化をきたさないものを接頭語として品詞分類の対象にし、一方、接頭語よりも比較的具体的な意味を添え、下の語と合して、それが単独で表しえない意味を表し、品詞分類の対象とならないものを接頭辞とする。又、二つ以上の単語がもつと具体的な本来の意味を互に保存しつゝ新しい意味を有する一単語を構成したものを複合語と認める。しかし、厳密にはこれらの区別はしにくく、その時に於ける言語主体の意識（一語と意識しているかいないか）によるのである。「その時」と云うのは、広くその一時代（例えば現代に於ける言語意識）の意味もあるが、前述の「ひきつける」の例の如く、その言語を使用したその場合と云う狭い意味をも有するのである。

—以上—

有間皇子の萬葉歌

三年　池沢美保子
岩下禎子
姫嶋多賀子

『萬葉集』に有間皇子の作として次の二首が伝つている。

①磐白乃浜松之枝乎引結真幸有者亦還見武　（巻二、一四一）

②家有者笥爾盛飯乎草枕旅爾之有者椎之葉爾盛　（巻二、一四二）

これらの歌がどんな動機から生れ、又いかなる社会状勢が、この歌の背景にあつたかと云う事は古来諸家の説くところであるが、私達は『日本書記』の記事より、これを推察していき、①の歌の解釈に役立てたい。

有間皇子は才36代孝徳天皇の皇子である。有間皇子をとりまく主な人物を系図に示すと次の如くなる。

34 舒明天皇
35 皇極天皇
37（齊明）
36 孝徳天皇
中大兄皇子
間人皇女
大海皇子
有間皇子
阿倍倉梯麻呂—小足媛

この系図から解るように、中大兄皇子と有間皇子は従兄弟同志の関係になるが、時の皇太子であり、中臣鎌足と提携して政治の実権をその手中に納めていた中大兄皇子と、孝徳帝の唯一人の皇子である有間皇子とは、お互に相手に対して心よからぬ思いを抱いていた事については、既に論ぜられている通りである。例えば『孝徳紀』の終りにみえるように皇太子が天皇の意志に逆つて倭の飛鳥ノ河辺ノ行宮に都を遷し、その為天皇は皇太子を恨みに思われ、皇位を降りようとなさつた事件等からうかがえる天皇と皇太子との不和は、天皇の皇子である有間皇子にも反映し、一層父帝の死後の有間皇子の運命に、宿命的な暗い影が投げかけられていたのである。このような事情の下に有間皇子に関する不祥事件が起つたのである。

齊明天皇の四年、天皇と皇太子が牟婁ノ湯に行幸の留守中、留守官である蘇我赤兄は有間皇子に謀反をそゝのかし、皇子はそれに乗じ赤兄と談じている途中、脇息が折れたのを凶兆とみてその場は約束だけに留める。がその夜直ちに赤兄の兵に家を囲まれ、捉えられる。一方赤兄は皇太子のもとに有間皇子謀反の報を遣つている。こうして有間皇子は牟婁ノ湯の皇太子の許に送られる事になつたのである。この事件は実は、北住敏夫博士も云われているように（『国文学』三十三年一月号才三巻）中大兄皇子の謀略によるものであるらしい事は『齊明紀』によつて推察出来る。

阿倍倉梯麻呂―小足媛

ところで皇子が中大兄皇子の裁きを受ける為、牟婁ノ湯に護送される旅の往路に詠まれたらしい「磐代の浜松ヶ枝を引き結び真幸くあらばまたかへり見む」には、皇子のどの様な気持が投影しているのであろうか。

私達はここで『孝徳紀』に現れる阿倍倉梯麻呂という人物の存在に気付くのである。阿倍倉梯麻呂は、有間皇子の母である小足媛の父、つまり皇子の祖父であり、大化改新後、中大兄皇子が以前に引き続き皇太子となつた時、左大臣に敍せられている。

「以阿部内麻呂臣為左大臣。」（孝徳紀）

「立息長足日広額天皇女間人皇女為皇后。立二妃。元妃阿部倉梯麻呂大臣女曰小足媛。生有間皇子。」（孝徳紀）

「天皇詔阿部倉梯萬侶大臣。蘇我石川萬侶大臣曰。当遵上古聖王之跡而治天下。復当有信可治天下。」（孝徳紀）

「阿部大臣薨。天皇幸朱雀門

挙哀而慟。皇祖母尊。皇太子等。及諸公卿。悉随哀哭。」（孝徳紀）

以上の資料より有間皇子の祖父阿倍倉梯麻呂は相当の勢力者であつた事が推察される。従つて中大兄皇子も、倉梯麻呂と天皇を背景にもつた有間皇子には、油断のならぬ存在であつたけれども、そう容易に手が出なかつたであろう事が推察される。然るに大化五年阿部大臣は失くなり、続いて白雉五年孝徳天皇が亡くなられる。父君の死後四年目にこの不祥事は起つたのである。

中大兄皇子は、大化五年右大臣であつた蘇我倉山田麿が反いたという虚言を聞き、蘇我倉山田麿を殺させ、その後に蘇我倉山田麿が死ぬまで自分に忠心を抱いていた事を知つて後悔し恥じ悲しみ歎くと言う記事が日本書紀にみえるが、これからも中大兄皇子は、常に自分の政敵を恐れていた事は明かである。中大兄皇子は前に全然罪もない、しかも出家してしまつた異母兄、古人大兄までも殺している。このようにつぎつぎと政敵を倒し、権力をほしいまゝにしているところから非難は、たかまつていたもののようである。後に大海皇子に人望が傾いていつた事実も無道な中大兄皇子に対する不満、憎悪のあつた事を物語るものと言えよう。そう言う中にあつて一番の政敵である有間皇子を倒すにあたつては、慎重さをもたざるを得なかつたであろう。

前にも述べた様に有間皇子は孝徳天皇の皇子である。つまり皇子を指示する孝徳天皇派の豪族も居るはずで、その中阿倍倉梯麻呂は左大臣と言う非常な権力者であり、舒明紀にみえる「蘇我蝦夷臣為大臣。独欲定嗣位。顧畏郡臣不従。則興阿倍麻呂臣議。而聚郡臣。」の記事からも阿部大臣は早くから重い役につき、相当の支持者をもち人望も厚かつたであろう事も見逃せない。阿倍大臣によつて築かれていた孝徳天皇派の豪族、そう言う政治的バックを有間皇子はもつていたのである。『齊明紀』に、有間皇子が蘇我赤兄の誘いに乗つて「吾年始可用兵時矣」と言つている記事がみられるが、有間皇子はかねてより、このような好機をうかがつていた事が伺える。その目的を推進させる為の主要な地盤には、亡くなつた祖父阿倍倉梯麻呂の築いた政治的バックをと言う目安がたつていたのであろう。この様な何らの背景もなかつたならば「兵を用うべき時なり」などとは言えるはずがない。

中大兄皇子は牟婁湯に裁きの為に護送された有間皇子を表面上は何事もなかつたかのように、一応送り返している。しかし刺客をやつて途中秘密の内に殺すと言つた赤兄との功妙な策略によつて失脚させた如きも、自分の責任

る。後に大津皇子に大皇太[illegible]

兄皇子に対する不満、憎悪のあつた事を物語るものと言えよう。そう言う中にあつて一番の政敵である有間皇子を倒

逃れをせんが為の、有間皇子の政治的バックの反抗の恐れであつたろう。

有間皇子は反謀を起しているのではなく、反謀の疑いがあるだけである。そんな自分を死刑の罪に処せようものなら周囲が黙つてはいまい。中大兄皇子に対する非難はたかまり、果はその地位までも危くするかも知れぬ。政治的バックをもつている有間皇子はそれに頼みをかけまさか中大兄皇子は自分を死刑の罪に処せる事はないであろうと言う気持もあつたに相違ない。それ故に絶望的じやない一縷の望みが託されているのである。もしかしたら無事に…と言う一縷の望みがあるからこそ「真幸くあらばまた還りみむ」の言葉が発せられたのであろう。

そこで同じ辞世の歌（持統天皇の御代やはり謀反の意図の発覚によつて死刑の罪に処せられた。）である大津皇子の「ももづたふ磐余の池に鳴く鴨の今日のみ見てや雲隠りなむ」（巻三・四一六）と有間皇子の歌を比較してみればその間の事情は一層截然とするのではなかろうか。即ち同年輩の二人の皇子が「死」に臨じて詠じた各々の歌には、ある相違が認められる。乃ち大津皇子の歌には非痛と共に朱めきつた心情が静かに詠まれている。ここで日本書記を参照してみると、大津皇子には有間皇子の場合の様な有力な地盤を見出し得ないのである。同じ死を臨じて詠んだ歌ではあるが、大津皇子の歌が死のみを感じさせるのに対し、有間皇子の歌は只死一色に塗り潰されていない、どこかにまだ何かの望みが余韻として残されている。これはやはり政治的バックに心の綱をかけていたとみるべきであろう。

最近の北住敏夫の御論考「有間皇子」（学燈社国文学三十三年一月号）でさえも有間皇子の政治的バックと言うものには全然ふれられてはいない。「『真幸くあらばまた還りみむ』と言うのはどこまでも仮定で空しい希望にすぎないかもしれないと言う予感をもつて、仮定的な言い方をしたのだ」と論じておられる。又「これに動揺や苦悩があらはでないのは、悲しみに溺れてしまわない葛葉歌人の強さだ」と言う風に論をすゝめておられるが、私達は「真幸くあらば…」は単なる空しい希望を言つたのではなく阿倍倉梯麻呂の築いていた政治的バックに頼みをかけ、もしかしたらと言う一縷の望みがあつたからこそあの言葉を発し得たのだと解釈したい。そうしてはじめて、そこに力強さがにじみ出ている由縁がのみこめるのである。

註1　阿倍内麻呂、公卿補任に「左大臣阿倍倉橋麿一名内麻呂。大鳥大臣子云々　日本紀梯号大鳥大臣　大化元年六月十四日天皇即位。　此時為左大臣五年三月十七日薨。」とある。書記の記録からすれば阿倍倉梯麻呂　阿倍内麻呂　阿倍臣　阿倍鳥麿　阿倍鳥臣等は同一人と推定される。